

資料

ボアソナード氏刑法修正案意見書

吉井 蒼生夫

解説

ここに紹介する資料は、一八八〇年（明治二三）七月公布、一八八二年（同二五）一月施行の刑法（以下旧刑法という）に対する参事院の改正案についてのボアソナードの意見書（「査評書」）である。^①本資料は、数少ない参事院の刑法改正作業に関する資料であると同時に、ボアソナードの旧刑法の制定およびその改正過程における位置・役割、さらに彼の刑法思想・刑法理論を知る上で、貴重な資料である。

旧刑法は、一八七五年（明治八）に始まる司法省の編纂作業、刑法草案審査局による審査・修正、元老院の審議という三つの過程をへて制定された。それは、一八一〇年のフランス刑法を基礎とし、他にドイツ刑法、ベルギー刑法など、当時のヨーロッパ諸国の刑法を参酌しつつ、ボアソナードの折衷主義理論にもとづいて起草された草案（「日本刑法草案」一八七七年一月）に修正を加えて制定されたものであった。

このわが国最初の近代法典である旧刑法の施行にあたっては、大審院・各裁判所（判事、検事）・警視庁・各府県など

から司法省あるいは参事院(太政官)に対して数々の「伺」「請訓」「質問」などが寄せられ、司法省や参事院では、これらに対し「指令」「内訓」「説明」「解答」をもって対応した。しかし旧刑法の施行前後には早くも、司法省をはじめ政府部内において、「新刑法治罪法頒布已来幾ント茲ニ一周年ニシテ早晚其実施ノ期ナカルヘカラス謹ンテ二法ヲ読ムニ本邦今日ノ時態ニ適當セサル条項実ニ枚挙ニ遑アラス」(『岩倉具視関係文書』「新刑法・治罪法に対する意見」断簡)といった認識がひろがるとともに、旧刑法の改正問題がもちあがり、いくつかの改正案が作成された⁽²⁾。

司法省は、一八八二年九月一日、刑法中改正増補の儀について太政官に申奏した。すなわち、

当一月来新法実施相成候処實際差支ノ件々不少候ニ付刑法治罪法トモ改正セラレタキ条々有之依テ取調申奏致スヘク候得共差向刑法第八十一条及第四百二十五条中ノ第十二項ヲ删除シ第六十六条第七十九条第八十条同条第二項第八十三条同第二項第二百六十一条第三百八十条第三編第二章第六節ヲ改正シ更ニ第九十一条第二百二十五条中ニ各一項ヲ増補シ尚第二編第三章中ニ第十節ヲ創定セラレ度因ニ別紙御布告案相添此段申奏候也

明治十五年九月十六日

司法卿 大木 喬 任

太政大臣 三条 実 美 殿

御布告案(省略)

また、一八八三年(明治一六)七月、同年八月一日にそれぞれ旧刑法の一部改正案を太政官に上申する一方、「刑法中重罪ヨリ以テ違警罪ニ至ル迄ノ刑期加重ノ件竝ニ同ク第四編改正ノ件」⁽⁴⁾を中心に、全般にわたる刑法改正案を太政官に提出した。

太政官では、この司法省の改正案⁽⁵⁾を参事院に下付し、審議せしめた(『参事院章程』第七条第二「各省ヨリ上稟スル所ノ

法律規則案ヲ審案シ意見ヲ具ヘ或ハ修正ヲ加ヘ内閣ニ上申ス。参事院では、法制部が審案を担当し（「参事院章程」第一条）、まず部會議において審議・修正され（この作業には、議官井上毅・同鶴田皓・議官補清浦奎吾・員外議官補名村泰蔵があつた）、一八八三年五月一八日、「第三十三号總會議々案 刑法改正ノ件」（以下「参事院總會議提出案」という）として、参事院議長山県有朋に報告された。これが總會議に付され、再度前記委員による修正をへたのち、總會議で修正議決した案（「参事院議決案」）を内閣に上申した。⁽⁶⁾

この間議長山県有朋は、「参事院總會議提出案」についてボアソナードの意見を求めた。一八八三年六月一日にこれを受けとつたボアソナードは、「司法省ノ命ヲ奉シ從事スル所ノ法案未タ終結セサルモノアリテ先ツ之カ成稿ヲ要シ加フルニ法学校生徒卒業試験等ノ事アリタルカ為メ」、およそ一ヶ月後の同年七月九日に意見書（「査評書」）を答申した。本資料がこれである。

ボアソナードは、この意見書（「査評書」）において、「今回ノ改正案（「参事院總會議提出案」）をさす——吉井）タル音ニ法理上ノ全備ヲ失シ道理ニ戻リ穩当ヲ欠クニ止マラス又実ニ野蠻ノ一法典タルヲ免レサルヘキナリ」と評するとともに、このような内容の改正がなされることで条約改正交渉にも悪影響が及ぶであろうことを指摘し、かつて自らが起草した草案（「日本刑法草案」）に復する方向での改正がなされることを期待している（ちなみに、ボアソナードは、「日本刑法草案」に対して加えられた刑法草案審査局による修正に強い不満をいだいていた。⁽⁷⁾）

内閣に上申された「参事院議決案」がいかなる経緯で廃案になったかについては不明であるが、かかるボアソナードの意見書（「査評書」）が、少なからぬ影響を与えたものと推測される。

なお、原本では訳者の注記を本文中二行ドリとしているが、復刻にあたってこの部分を「」で示した。また、フ・片・メは、コト・トモ・トキ・シテに改めた。

(1) 本資料は、一橋大学図書館に所蔵される『刑法修正案並ニボアソナード意見書 完』(本書は、「清浦」の朱印がおされていることから、参事院の刑法改正作業に携わった議官補清浦奎吾が、使用したものと推測される。)の中の「ボアソナード氏刑法修正案意見書」で、訳者は、曲木如長と緒方重三郎である。なお、本資料の存在を指摘し、これを用いた研究に、村井敏邦「わが国における公務執行妨害罪規定の沿革」(『一橋大学研究年報 法学研究一〇』一九七七年)、『公務執行妨害罪の研究』成文堂、一九八四年所収がある。同書七〇頁以下を参照。

(2) 拙稿「現行刑法の制定とその意義」(杉山晴康編『裁判と法の歴史的展開』敬文堂、一九九二年所収)を参照。

(3) 「旧刑法・治罪法及旧刑事訴訟法編纂沿革(三)」(『法曹会雑誌』第八卷第一〇号)一四一頁—一四七頁を参照。

(4) 同右、一四四頁。

(5) 国学院大学図書館所蔵「梧陰文庫」の整理番号B1928の「刑法改正案」がこれであると思われる。なお、手塚豊「明治十六年・参事院の刑法改正草案」(『法学研究』四二卷一〇号)、『明治刑法史の研究(上)』、慶応通信、一九八四年所収)では、これを司法省の第一案とする(同書、二二七頁の注(一〇)を参照)。村井前掲論文は、この手塚説に疑問を呈している(前掲書、七二頁の注(五)を参照)。

(6) 以上の経緯については、手塚豊・前掲「明治十六年・参事院の刑法改正草案」を参照。なお、前掲『刑法修正案並ニボアソナード意見書 完』の中の「刑法修正案」(「刑法」)の表紙には、朱筆が原案(司法省の改正案を委員が修正整理したもので、「参事院総会議決案」となるもの)、青筆が修正委員修正案、赤筆が総会議決案(「参事院議決案」となるもの)と注記されており、参事院の刑法改正作業の経過を知る上で貴重な資料である。参事院の刑法改正案については、順次本紀要に掲載する予定である。

(7) ボアソナードが、自らが起草した「日本刑法草案」に加えられた修正に対して批判的であったことについて、吉井蒼生夫・藤田正二新倉修編著『刑法草按注解上』(日本立法資料全集8、信山社、一九九二年)「第一部 明治一三年刑法の編纂経過」を参照。

(付記) 本資料の閲覧・複写の許可を与えられた一橋大学図書館のご厚意に対し、深く感謝の意を表する次第である。

祕（朱）

ボアソナード氏 刑法修正案意見書

我刑法ハ当初貴下ノ起草ニ係リ頗ル完備ノモノナリシト雖モ其後審査修正ヲ加ヘ變更増減シタル条件少ナカラス実施後寛嚴其宜ヲ得サルモノ及条項ノ不備ナルコトヲ発見セリ夫レ法ノ容易ニ改正スヘカラサルモノタルハ固ヨリ論ヲ俟タス然リト雖モ苟クモ其条項ニシテ時勢民情ニ適セサルモノ若クハ闕典アルトキハ之レカ修正増補ヲ為スハ蓋シ亦已ムヲ得サルモノナリ故ニ這回別冊朱書ノ如ク修正ヲ加ヘントス之ヲ法理ニ照ラセハ稍ヤ穩当ナラサルモノアルカ如シト雖モ皆實際ノ必要上ヨリ起ルモノナリ該修正案ニ就キ貴下ノ意見ヲ諮問ス幸ニ貴下覆藏ナク貴見ヲ陳述セラレンコトヲ冀望ス敬具

明治十六年五月

参議 山縣有朋

ジエ、ボアソナード貴下

別冊修正案畧之

謹テ茲ニ本日ヲ以テ曩ニ下問ヲ辱フシタル刑法修正案ノ査評書ヲ奉呈ス

閣下ノ刑法修正案ヲ下附シ以テ僕ノ卑見ヲ問ハレタルモノ実ニ本年六月一日ニ在リテ今ヲ距ル既ニ三十余日前ニ係レリ而シテ僕ノ査評書ヲ呈スル此ノ如ク遲滞シタル所以ノモノハ僕はレヨリ先キ司法省ノ命ヲ奉シ從事スル所ノ法案未タ終結セサルモノアリテ先ツ之カ成稿ヲ要シ加フルニ法学校生徒卒業試験等ノ事アリタルカ為メ遂ニ竟ニ荏苒今日ニ及ヘルモノナリ

今草呈スル所ノ査評書ニ於テハ僕唯タ逐条修正案ヲ論評セリ(修正案中僕全ク賛成スル所ノ點ハ其舊草案(按スルニボアソナード氏自家ノ起草シタル所ノモノヲ云フ)ニ復シタルノ條款ノミ)其全体ニ對スル總評ニ至テハ僕茲ニ本書ヲ以テ之ヲ閣下ニ上陳セントス是レ應サニ閣下ヲシテ分明ニ卑意ノ存スル所ヲ了知セシムル最確ノ方法タルヘシト信スルヲ以テナリ

今順次修正案ノ全体ヲ論評スルニ際シ先ツ閣下ノ高聽ニ達セントスルモノアリ他ナシ今起案セラレタル所ノ改正タル基本原ノ草案ニ復セントスルモノヲ除クノ外ハ皆ナ痛惜スヘキノ結果ヲ生スヘキコト是レナリ此結果タル其係ル所當ニ日本国民ニ止マリテ為メニ其正義ノ心情ヲ毀傷スルノミナラス亦タ大ニ外國ノ公使ニ及ホシ之カ為メ竟ニ將來各國臣民ヲシテ此法律ノ下ニ立タシメントスルノ念慮ヲ斷絶セシムルニ至ルヘキナリ

且夫レ改正ノ刑法(按スルニ現行刑法ヲ云フ蓋シ氏起草スル所ノ草案ニ對シテ爾カ云フナリ)タル既ニ業ニ刑罰ノ節制、穩當、權衡等凡ソ其草案ニ於テ力ヲ竭シテ按定シタル性質ノ大半ヲ亡失セルカ故ニ世ノ練達ノ法家タルモノ皆ナ其條款ノ序次聯續ノ間ニ等一合致ヲ欠キ種々雜駁ニシテ而モ往々相矛盾スル所ノ思想ニ鼓舞セラル、モノアルヲ覺ヘリ而シテ人亦タ實ニ其中法学ノ極義ニ達シタル理論ノ傍ニ於テ全ク欧州ノ陳腐ニ屬シ且ツ泥古ノ弊習ヲ取用シタル法典ノ條款ヲ寫出セルヲ見ルナリ

其レ然リ然ルニ今ヤ政府復タ将ニ之カ改正ヲ為サントシ其改正タル愈々出テ、愈々拙ナク竟ニ将ニ全ク原来遵守スル所ノ原則ヲ失ハントス僕等ニ其舉ノ拙劣ナルヲ見ルノミナラス又大ニ其冒險ナルヲ見ルナリ蓋シ案中、罰、皆ナ罪ト權衡ヲ得スシテ常ニ苛酷ニ失シ彼ノ死刑ノ如キハ極惡ノ罪犯ト雖トモ人猶ホ之ヲ科スルノ正當ナルヲ論難シ欧米諸邦ニ於テハ刑法ノ改正アルニ際シ毎ニ漸次之カ施用ヲ減少スルノ狀況ナルニ今ヤ事、遠ク此ニ出テスシテ反テ之ヲ増加シ毫モ此極刑ヲ科スルヲ須ヒサル十一回若クハ十二回ノ場合ニ於テ之ヲ宣告セルカ如キ何ソ其ノ嚴酷ナル

依是觀之今回ノ改正案タル當ニ法理上ノ全價ヲ失シ道理ニ戻リ穩當ヲ欠クニ止マラス又實ニ野蠻ノ一法典タルヲ免レサルヘキナリ（第九十七條、第一百六條追加、第四百十條、第四百三十三條追加、第三百五十一條、第三百六十二條、第三百六十三條、第三百六十四條、第三百六十五條、第三百八十條、第三百八十一條ヲ見テ之ヲ知ルヘシ）猶ホ茲ニ殊ニ閣下ノ注意ヲ仰カントスルノ一點アリテ存セリ

客年外務省ノ條約改正ヲ行ハントシタルノ際ニ當テヤ新定ノ刑法治罪法與テ大ニ其要求ノ憑據タルコトヲ得タリ而シテ其爾ク馮據タルコトヲ得タリシ所以ノモノハ蓋シ一ニ其草案ノ完備ナリシカ為メニシテ其外國諸法典中最良ノ條款ヲ取用シ猶ホ殊ニ之ニ改良ヲ加ヘタルモノナリトノ聲名ヲ博シタルニ由ルナリ然リ而シテ當時外務省ハ唯タ此法典ヲ示スノミニテ足レリトセス猶ホ又諸外交官ニ通照スルニ佛、白、蘭、獨諸邦ノ外國法律雜誌ニ掲ケタル諸法家ノ好評佳讚ヲ以テセリ而シテ有名ナル伊國ノマンチニー氏ノ如キ亦タ特ニ一書ヲ寄セテ極メテ之ヲ讚賞セリ

然ルニ外國公使タルモノ皆ナ法ノ學識ナカリシカ故ニ公布刑法（政府ヨリ公然布告シタル者ヲ云フ即チ現行刑法ヲ謂フナリ）ト其草案トヲ比較スルコトヲ為サス異議ナク之カ完全ノ價直アルコトヲ認了シ遂ニ論據ヲ轉シテ新任法官ノ不練ニ移シ且其果シテ政府ノ權力ニ對シ不羈特立ノ地位ヲ保テルヤ否ヲ疑ヒテ竟ニ改正ノ議ヲ拒ムニ至レリ然リ而シテ治罪法中被告人ニ對スル諸般ノ保護ニシテ其法實施以來大半閣止シテ行ハレサルノ事實ハ彼レ固ヨリ之ヲ知ラサル

ナリ

果シテ然リ然ルニ今実施以來日子ヲ經ルコト纔ニ十八月ニ過キサルニ政府既ニ之カ改正ヲ為シ殊ニ益々刻薄ノ主義ニ傾カントスルニ於テハ前述ノ事果シテ如何ナル結果ヲ生スルニ至ランカ

且夫レ往キニ其第一回ノ改正ニ由テ大ニ不完ノ法律タラシメタルニ拘ハラス既ニ一タヒ嚴格ニ此法典ヲ公布シ今ニシテ復タ全然之カ精神ヲ變更シテ其僅ニ存スル所ノ法理、穩当、節制ヲ除去セントスルニ於テハ人將タ何等ノ信任ヲ日本ノ法律ニ置クヘキカ

人將ニ此舉ヲ觀テ下タスニ演劇ノ冷評ヲ以テセン而シテ日本ハ將ニ欧米人ノ目シテ與ミシ難ク理メ難キノ国ト為スニ至リ其年來開明諸國ノ同夥ニ加ハラント欲シ幸ニ中誠大度ノ力ニ由テ漸ク収受シ得タリシ所ノ情好ヲ失フニ至ランカ夫レ抑モ世ノ無識ニシテ力ノ足ラサルカ為メ又ハ故サラニ為メニスル所アルカ為メニ政府ヲ促シテ其政府ニ於テ固ヨリ自進セントスルノ意向アラントスル所ノ反動ノ方向ニ誘ハントスルモノ、如キハ蓋シ僕ノ遠ク與ミセサル所ニシテ茲ニ政府ニ告クルニ其將ニ蒙ラントスルノ危厄ヲ以テスルモノ即チ當サニ僕ノ守ルヘキノ本分ナルヘシト固信スルナリ

夫レ道理ヲ外ニシ正義節制ヲ守ラサルノ法ニシテ永續恒行セラル、モノ世未タ嘗テ其例アルヲ見ス殊ニ刑法ノ如キハ其最モ然ルモノナリ

今日日本ノ人民ハ嚴刑酷罰ニ依ルニ非レハ基本分ヲ遵守スルコト能ハサルノ人民ナリト謂フヲ得ヘキ歟是レ實ニ國ヲ誣ルノ甚キモノト謂フヘシ僕ノ見ル所ハ大ニ之ニ反シ日本人民ノ如キハ寰宇中最モ控御シ易キ人民ノ一ニ屬スルモノナリ蓋シ彼レ實ニ天賦ノ溫和ナル性氣ヲ有シ往キニ一時武人特權制度ノ為メニ大ニ其質ヲ變スルヲ免レサリシト雖トモ王政ノ復古及ヒ之ニ次ク所ノ善良ナル改革ニ依リ竟ニ再ヒ其原性ニ復スルニ至レリ

夫レ道徳上ノ福祉ト其目的トシテ保護スヘキ社会秩序ノ約款ハ時ノ古今ヲ問ハス洋ノ東西ヲ論セス常ニ幾ント相同シキモノナルカ故ニ刑法ノ如キハ時ト處トノ感化ヲ受クル最モ少ナカラントヲ要スルノ法律ニ屬スルモノタリ且夫レ既ニ刑法ヲ設ク必スヤ一タヒ明ニ事ノ道徳ノ倫常ト社会ノ秩序ニ反シテ禁止ヲ要スヘキモノヲ確定シ且ツ罪ノ輕重ト相權衡スル所ノ刑ニ由テ其禁制ノ遵行ヲ保証シ又慎重、恒心、節制ヲ以テ此等ノ刑ヲ適用スルニ至ランコトヲ勉メサルヘカラサルナリ

今夫レ日本刑法治罪法ノ草案ノ如キハ勤勉ナル二委員ノ時ヲ費シ慮ヲ罄クシテ傍ラ欧州最良ノ諸法典ニ照考シ反覆論議シテ以テ起草シタル所ニシテ実ニ異口同音ノ讚歎ヲ外人ニ得タルモノナリ

然ルニ今ヤ將ニ其第一回修正ノ御纔ニ餘喘ヲ存スル所ノモノヲ消盡セシメントスルカ如キハ抑モ亦タ当ヲ得タルノ處分ト謂フヲ得ヘキカ宜キニ適スルノ措置ト稱スルヲ得ヘキカ

之ヲ要スルニ今政府刑法ノ改正ヲ為サントスルコト寧口時宜ニ戾ルノ事業タルニ庶幾ンカ伏テ願クハ閣下深ク鑑ミ遠ク慮テ以テ採擇スル所アランコトヲ

僕今忌諱ヲ憚ラスシテ微意ノ存スル所ヲ吐露セリ若シ夫レ閣下僕ノ誠心ニ於テ閣下及日本政府ニ対スル忠愛ノ真證アルヲ見僕ノ不遜ヲ咎ムルコトナクンハ幸甚恐懼頓首

千八百八十三年七月九日

ジエ、ボアソナード

陸軍中将兼參議參事院議長山縣有朋

閣下

刑法修正案意見書

第一編

余ハ修正ヲ加ヘラレタル條款ノ順序ニ從テ逐次其修正ノ各件ニ付キ鄙見ヲ吐露シ最後ニ此改正ノ全体ニ就キ論評スル所アラントス

唯爰ニ一言セント欲スルハ本案ノ全文ヲ通讀スルニ当リ其ノ極メテ嚴酷ナルノ徴憑ヲ発見セリ余ハ之ヲ以テ社会ノ安寧ヲ維持スル為メ緊要ト看做サ、ルナリ

是ニ又惜ム所ハ今回改正ノ舉アルニ際シ嘗テ刑法草案中削除セラレタルヲ遺憾ト為セシ所ノ若干条件ヲ復セラレサリシニアリ故ニ余ハ敢テ左ニ右削除ノ条項若干ヲ列記シ而シテ余カ遺憾ト為セシ所ノ理由ヲ開陳ス可シ

第一条

既ニ前文ニ陳ヘタル如ク先ツ第一条ヨリ論述センニ所謂三種ノ犯罪ヲ區別スルノ方法ヲ削除セラレタリ蓋シ単ニ重罪輕罪違警罪トノミ掲ケ如何ナル徴表ニ依テ犯罪ノ等級ヲ認定ス可キヤ法律ニ之カ明文ヲ載セサルトキハ其條款ニ於テ重罪輕罪違警罪ナル普通ノ文字ヲ使用スルヲ禁スルモノトス然ルニ此等ノ文字ハ刑法ニ屢々載スル所ニシテ治罪法ニ於テ尚ホ一層多シトス

刑法草案註解ニハ此第一条ニ付キ釈義ノ須要ナルヲ説キ純然タル學術上ノ稱呼ヲ附スルノ至難ニシテ獨リ實際上ノ稱呼ヲ用ユルノ一途アルヲ述ヘタリ

第四条及ヒ第五条(草案)

刑法草案中日本臣民ノ外国ニ於テ犯セシ重軽罪ニ関スル第四条及ヒ第五条ヲ刑法典ニ削除シタルハ余カ常ニ異ム處ナリ蓋シ外国ニ之カ例ナキカ為メナランカ否ナ然ラサルナリ何トナレハ白耳義、獨逸、和蘭、伊太利、佛蘭西等ノ諸国ニ於テハ此點ニ付キ正条アレハナリ

此条則ハ佛蘭西ニ於テハ千八百〇八年ノ法典（第五条乃至第七条）ニ於テ制定セラレ千八百六十六年ニ改正ヲ加ヘラレタリ

日本刑法草案ニハ其條款ヲシテ更ニ明瞭完全ノモノトナラシメタリ

盖シ日本法律ニ於テハ外国政府カ日本臣民ニ向テ裁判權ヲ有スルヲ以テ日本人ノ外国ニ於テ犯セル重軽罪ヲ罰スルコト能ハスト信スルハ大ナル誤謬ナリト謂フ可シ設シ此道理ヲ以テ正当ナルモノトセハ欧州各国ハ皆ナ裁判ノ全權ヲ有スル他ノ国土ニ於テ自国人ノ犯シタル重軽罪ヲ罰スルコト能ハサル可キナリ然ルニ此刑例ハ業ニ已ニ規定セラレタルニ非スヤ夫レ然リ故ニ今一例ヲ舉テ之ヲ証センニ犯人裁判ヲ經ズ又ハ抗傳裁判ヲ經ルニ過キスシテ其重罪ヲ犯シタル国土ヲ遁逃スルコトアル可シ而シテ其帰国スルニ当リ其罪ヲ不問ニ措ル、トキハ其国ノ為メ一大耻辱ニシテ且永世紛擾ヲ醸スノ原因トナル可シ

亦日本刑法ニ明文ナキカユヘ欧州ニ於テ盜又ハ殺人ノ罪ヲ犯シタル日本人ハ特別ノ條款ナキモ之ヲ日本ニ於テ罰シ得可シト信スルハ誤解タルヲ免カレサルナリ是故ニ如何ナル法律家ト雖トモ刑法ノ原理ニ從ヒ此說ヲ主張スルモノハ非サル可シ

第四条（公布刑法）

余ハ日本ノ陸海軍ニ関スル刑律ヲ知ラサルナリ唯タ陸軍及ヒ海軍刑法ノ草案アルコトヲ聞クノミ然レトモ右法律中凡ソ該刑法ノ一般ノ定規タル普通ノ刑法ニ準據スルヲ要セサルノ條款アルヲ疑フ

公布刑法第四条ニハ此法律ハ陸海軍人ニ適用セスト明記セリ是レ頗ル冒險ノ事ト思ハル草案第九条ハ之ト大ニ異ナリテ普通ノ刑法ヲ以テ陸海軍ニ関スル刑律ノ基礎ト為セリ而シテ此刑律ノ適用ヲ限リテ犯罪人ノ身分又ハ犯罪ノ性質ニ因據シタル格段ノ条則ニ止メタリ

公布刑法第五条ハ特別ノ法律規則ニ関スル事項ニ付キ之ニ優ル處アリ則チ該法律規則ニ於テ別ニ総則ヲ掲ケサル場合ニ於テハ刑法総則ノ適用ヲ保持セリ

第八条

草案中懲戒ノ禁錮ヲ區別シテ附役又ハ單一禁錮ト為シタルヲ重、輕ノ文字ニ代ヘラレタルハ余カ遺憾トスル所ナリ何ントナレハ禁錮ト懲役トノ間徑庭アルヲ以テ之ヲシテ近接セシメンカ為メナリ元來重、輕ノ文字タル懲役ニ適用スルトキハ其刑期ノ長短ヲ表示スルノミニシテ監獄ノ制ニ於テハ共ニ一ナリ重、輕、禁獄、モ其刑期ニ依レハ同一ニシテ亦監獄ノ制モ其二箇ノ場合ニ於テ寬嚴ノ差等ナシトス

草案ニ掲クル所ノ附役禁錮及ヒ單一禁錮ノ名称ハ獨リ此二刑名ノ確實ナル差等ヲ表明スルノ利益アルナリ

第十条

本条ニ於テハ私權実行ノ停止ニ代フルニ禁治産（按スルニ日本刑法ノ譯文ニハ「私權ノ禁止」トアリテ禁治産ナル文字ヲ記載セス是レ此論ノ依テ生スル所以ナル可シ）ヲ以テセラレタリ此ノ如キハ人ヲシテ犯人ノ最早私權ヲ有セズ又持主債主タルコト能ハサルヲ思ハシムルモノニシテ全ク虛妄ナリ蓋シ犯人ハ其權利ヲ保存シ依然之ヲ享有スルモノニシテ其ノ失フ處ハ該權ノ実行ニアリ則チ之ヲ管財人ニ委托スルモノナリ

右ノ如ク確實ノ考案ニ代フルニ虛妄ノ考案ヲ以テシタル所以ノモノハ佛国法律ノ欠典之ヲシテ然ラシムルモノニアラス蓋シ日本法典ハ此欠典ヲ認知シテヨリ七十年ノ後ニ制定セラレタルモノナレハ之ヲ彼ノ法律ニ責ムルハ酷ナリ然ル

ニ第三十五条（日本刑法）ニハ私權実行ノ禁止ナル適良ノ文辭ヲ存シタリ
附加刑ノ条項ニ於テハ處刑ノ公告ニ関スル第七項ヲ削除セラレタリ

是レ又遺憾ト云フ可シ何トナレハ孰レノ場合ヲ問ハス重罪ノ處刑ニ於テハ此公告ノ啻ニ自餘ノ人ヲシテ犯人民事上ノ
不能力ヲ知ラシムル為メ緊要ナルノミニアラス又輕罪ノ事件例ヘハ誹毀ノ罪ニ於テモ此公告ヲ為ストキハ裨益アルコ
ト少カラサレハナリ加之被害者ノ損害ニ向テハ之カ賠償ノ原因トナル可ク其他腐敗シタル有害ノ食料又ハ贗造ノ度量
ヲ販売シ若クハ官許ヲ得シテ藥品ヲ販売シタルノ罪犯ニ於テハ此公告ノ為メ同一人カ同種ノ輕罪ヲ再犯スルコトヲ
予防スルニ至リ且公衆ヲシテ其危害ヲ蒙ル可キコトヲ知ラシムルニ至ル可キナリ

第十一条

凡ソ此ノ法律ニ於テハ刑ノ執行ニ関シ一ノ規則〔按スルニ刑法附則ヲ云〕ニ据ラシムルコト屢々ナリ
試ニ問フ此規則ナル者ハ之ヲ制定シタルヤ

又其規則ハ日本文ハ勿論外国文ヲ以テ之ヲ公ニシタルヤ

蓋シ此規則ノ條款ハ治外法權ヲ廢棄セント欲スルニ当リ其商議ニ大ナル影響ヲ及ホスコトヲ得可シ

日本刑法ヲ査閲セシ所ノ外国ノ法律家（就中「アムステルダム」府、博士ハメル氏）ハ此規則ヲ以テ犯人ノ罪狀ヲ重カラ
シメントノ恐レヲ懷キシモノ、如シ

第十五条

今回ノ改正ニ際シ草案第二十条ニ掲クル所ノ死刑ニ處セラレタル婦女ノ懷胎ニ関シ證據ヲ舉クルコトノ条件ヲ復セラ
レサリシハ痛惜ス可キナリ

今如何シテ其婦女ノ懷胎ナルコトヲ知り得ンヤ

若シ其懐胎ニ付疑惑ヲ生スルトキ（此ノ如キ事ハ屢々アル所アリ）ハ刑ノ執行ヲ停止スルヤ

草案ニハ此事ヲ許可シタレトモ公布刑法ニハ之ヲ拒否セリ則チ不幸ニシテ佛国法典（第二十七条）ニ模倣セラレタルモノトス

其分娩後一百日間刑ヲ停止スルノ事タル遂ニ之ヲ赦免スルニ至ラサレハ之カ弁解ノ辭ナカル可シ蓋シ小児ヲ乳養スルノ時間ハ少ナクトモ一周年ヲ要スレハ此期限ハ不充分ナリ却テ徒ラニ其母ノ悲痛ヲ増スノミニシテ小児ノ為メニ有害ナル乳母タル可シ

此場合ニ於テハ刑ハ犯人ノ一身ニ存ス可キモノナレハ小児ノ權利ト諧合シテ其宜ヲ得ルコトハ頗ル難シトス是レ死刑ヲ正当ナリトスルノ説ヲ非難スルニ付キ最モ勢力アルノ弁論ナリト謂フ可シ

第十六条

草案第廿一条ニ記ス所ノ即時ナル文字ヲ削除セラレタルヲ以テ考フレハ犯人ノ死体ヲ外科手術ヲ以テ解剖シタル後ニ下附スルヲ得ルモノ、如シ但シ此事ニ付テハ大ナル不都合ヲ見ス乃チ若シ社会ニ於テ犯人ノ生命ヲ絶ツノ權アリト思惟スルトキハ之カ死体ヲ以テ學術上ノ進歩ニ供セシムルノ權アル可キナリ

第十七条

今回本条中島地トアルヲ政府ヨリ定ムル所ノ地ト改メラレタルハ不都合ナシトス

有期徒刑ノ期限十五年以上二十年以下ヲ十二年以上十五年以下ニ減縮セラレタリ（公布刑法）

此ノ刑期並ニ重軽懲役、禁獄ノ刑期ニ付テハ大木參議ノ命ニ依テ既ニ別々ニ卑見ヲ陳述シタリ

此刑期ハ唯タ三年ノ差異アルノミナルヲ以テ短少ニ失スルモノトス草案ニハ中間ヲ五年ト為セリ是レ最モ条理ニ適フモノニシテ而シテ有期徒刑ト無期徒刑トノ間ニ甚シキ懸隔アルコトナシ

第十八条

此條款ヲ廃棄セラレタルハ大害ナシ何ントナレハ草案第二十二条ト其主意ヲ異ニスルヲ以テ已ニ之カ裨益ヲ失スルヲ以テナリ

第二十条

卑見第十七条ニ同シ

第二十一条

本条ハ草案第二十七条ニ比スレハ已ニ不完全ノモノナリシカ今又之ヲ削除セラレタルハ遺憾ニ堪ヘサルナリ
此事タル既ニ政府ノ権理ニ属スル以上ハ刑ヲ微弱ナラシムルノ憂ナシ却テ犯人ノ行状ヲ端正ニスルノ奨励トナル可シ
是ニ於テカ刑ハ犯人ノ為メ勸善ノ一手段ナリシカ今ヤ一箇ノ懲罰タルニ過キス

第二十二条

重軽、懲役ノ刑期ハ六年以上十年以下及ヒ十一年以上十五年以下ニ復スルヲ要ス

第二十三条

禁獄ノ刑期モ亦六年以上十年以下十一年以上十五年以下ニ復セサル可ラス

第二十四条

既ニ上文ニ於テ重、罪輕禁錮ナル文字ヲ批評セリ

曩ニ禁錮ノ刑期ヲ七年ト為スノ發議アリシカ之ヲ排斥セラレタリ蓋シ全ク条理ニ反クノ事ナルヲ以テナリ

第二十五条

本条ニ於テハ作業ノ利益ニ関スル草案ノ條款ニ復セラレサリキ

余力爰ニ了解スル能ハサルノ事ハ百日ノ定限ヲ立ラレタルニアリ抑モ百日ノ後ニ非サレハ作業ノ利益ヲ所得トスル能ハサルノ意ナルカ将タ単ニ囚徒ニ之ヲ給與スル事ニ就テノミ之ヲ云フカ判然タルヲ得サルナリ

第二十七条

換フトアル文字ヲ改メテ換フコトヲ得トセラレ草案（第三十四条）ニ復セラレタリ余極メテ之ヲ賛成ス

第三十条

科料ノ事ニ付同一ノ修正ヲ加ヘラレサリシハ脱漏ト謂フ可シ何トナレハ換フナル命令法ノ文格ヲ存スルノ理ナケレハナリ

第三十三条

此条ハ専制ニシテ恐クハ嚴肅ニ失セン蓋シ輕重罪中纔ニ單一禁錮ニ處ス可キ短期ノ刑アル可シ而シテ之カ為メ官職ヲ失フノ結果ヲ来ス可キハ痛歎ス可キナリ依テ之カ區別ヲ立テ若クハ評定權ヲ裁判官ニ附與スルヲ得可シト信ス

第三十六条

本条ヲ削除セラレタルハ又遺憾ナリ蓋シ犯人ヲシテ勸善ニ導クノ道ヲ失ハシムルヲ以テナリ

第三十九条

本条中特赦ニ依リ監視ノ附加刑ヲ免除セラレサル旨ヲ追加セラレタルハ必要ノモノニ非サル可シ何ントナレハ他ノ條款ニ於テ復権ヲ得タル者ハ監視ヲ免スルトノ事ヲ掲載シタレハナリ然レトモ此追加タル他ニ重複スルコトナキトキハ妨ケナシ且百般ノ疑惑ヲ氷解ス可シ

第四十二条

之ヲ、但、及ヒ執行スルトアル文字中但ノ文字ヲ削除シ云云ノ後チニ非サレハ執行セスト改ムルヲ可トス

第四十三條

第一項ニ法律ニ於テ禁制シタル物件トアリ其文辭タル不分明若クハ不精密ナリトス蓋シ之等ノ物件ヲ所有スルコトヲ禁止シ及ヒ其所有主ニ対シテ之ヲ没収スルコトヲ得セシメンニハ其製造ノミヲ禁制スルヲ以テ足レリトセス例ヘハ猥褻ノ文書図面ノ如キハ法律ニ於テ之ヲ製造シ若クハ販売スル事ヲ禁制スレトモ之ヲ私有スル事ハ其限ニアラス其他軍用ニ供セスシテ危険ナル若干ノ武器ヲ私有スルコトモ亦然リ

草案第五十五條ノ明文ハ之ニ勝レリトス

第五十三條

流刑ノ囚徒ニ向テ仮出獄ヲ許スノ期望ニ復セラレシハ頗ル可トス

第五十四條

「其地」ナル文字ハ不可ナリ佛語ニテモ適當ニアラス須ラク之ヲ「其刑ヲ執行スルノ地」ト改ム可シ

第五十六條及ヒ第五十七條

草案第六十七條ノ如ク之ヲ合併スルヲ要ス

但タ新ニ禁錮ノ刑ヲ設ケラレシハ其當ヲ得タルモノトス蓋シ其罪、罰金ニ過キサルトキハ仮出獄ヲ許スニ足ラサルヲ以テナリ

第五十八條及ヒ次ノ條項

草案第七節（刑ノ消滅）ニ替ユルニ期滿免除ノミヲ以テセラレタルハ痛歎ス可キナリ

其他刑ノ消滅ニ関スル九項ハ之ヲ棄却セントノ意ナルカ

第五十九條

禁錮ニ関スル期滿免除ヲ七年ト為シタルハ痛惜ス可シ草案(第七十条)ハ之ニ此スレハ更ニ齊一ニシテ拘留ヲ除クノ外ハ刑ノ最長期ヲ要シタリ蓋シ拘留十日ノ期限ハ期滿免除ノ為メ短少ニ失スレハナリ

第六十二条

本条ハ公訴ノ期滿免除ト刑ノ期滿免除トヲ混淆シタル結果タルヤ明白ナルヲ以テ之カ誤正ヲ加ヘラレサリシハ遺憾ト謂フ可シ

此條款ニ據レハ決シテ刑ノ期滿免除ハ之レナカル可キナリ何ントナレハ裁判官ハ何時ニテモ逃走ノ囚徒ニ対シ逮捕ノ令状ヲ發スルコトヲ得レハナリ

ハメル氏(「アルステルダム」府博士)ノ此大錯誤ヲ發見セサリシハ幸甚ナリ蓋シ同氏ハ必ス之ヲ痛ク匡正シタル可ケレハナリ

第六十四条

本条ハ第三十九条ノ追加ヲシテ無益ノモノトナラシムルナリ

第六十六条

第九十一条ノ為メ除例ヲ設ケタルハ悲歎ニ堪ヘス蓋シ之ハ第九十一条ニ至テ指示スヘシ

第六十八条

「外国ニ関スル」ノ文字ヲ加ヘラレタルハ無益トス先ツ本刑ハ外国ニ関スル刑ニアラスシテ重罪ニ係ルモノナリ其他此重罪ハ国事犯ナリ但タ外国君主ノ生命ヲ危フスルノ逆罪ナレハ可ナシト雖モ此ノ如キ重罪ハ十中一モ之レナキモノナリ

第七十条

第二項ノ但ナル文字ハ公布刑法ニ記載シタルカ如キ文体ニテハ之ヲ存スルノ理ナケレトモ草案(第八十三條)ニ於テハ之ヲ存スルヲ以テ頗ル有益ナリトス

第七十五條

此條款ヲ削除セラレタル所以ハ如何其事明白ナリト看做スカ為メカ將タ不論罪ヲ是認セサルカ為メカ佛國及ヒ其他ノ國ニ於テハ此罪目ヲ無益視セス蓋シ根本ノ原則タルヲ以テナリ故ニ若シ此原則ヲ採用ス可ラサルモノト為スカ如キハ奇怪ト云フ可シ

第七十五條^{ママ}

何故ニ此條款ヲモ削除セサルヤ

第七十九條乃至第八十一條

犯罪ノ責任ニ関スル年齡ノ修正ハ總テ痛惜ス可キモノトス依テ之ヲ廢棄スルヲ必要トス

其ノ重輕罪ニ関シ十四歲ト一日ノ幼者ヲシテ成年者ニ準セシムルカ如キハ最モ認許ス可ラサルノ事トス

佛國法典ハ刑法上十分責任アル年齡ヲ十六歲ト定メタルヲ以テ既ニ大二世ノ譏ヲ受ケタリ然ルニ今ヤ之ヲ減少シテ十四歲ト為セシカ如キハ嚴酷ニ失スルノ甚シキモノト謂ハサルヲ得ス

若シ日本ノ幼者ヲ以テ其成長非常ニ速ニシテ刑法上ノ責任ヲ負ハシムルニ足ルモノトセハ何故ニ民事上十四歲以上ヲ以テ成年ト認メサルヤ

余ハ誤見ナカラントヲ確カムル為メニ本條ヲ三讀スルニ至レリ

第八十五條

自首減輕ヨリ謀殺故殺ヲ除キタルハ余ノ毫モ了解スル能ハサル所ナリ過失殺ヲ除キタルハ一層余ノ解釈セサル所ナリ

蓋シ第一回ノ改正ヲ為シ尋テ又此第二回ノ改正ヲ企画スル者ハ法律上此宥減ノ主意ヲ誤解セシモノト思ハル

第九十一条

本条第二項ノ修正案ハ不幸ニシテ佛国ノ法律ヲ採用セラレタルモノナリ

蓋シ再犯ナルモノハ之ノミニテ死刑ヲ科ス可ラサルモノナリ

第九十八条

余ハ三犯ノ場合ニ於テ刑ヲ加重スルノ不都合ヲ見スト雖モ此ノ如キ場合ニ当テ何故ニ盜罪ニ於ケルカ如ク各種ノ重輕罪ニモ同シク刑ヲ加重セサルヤ余カ了解スル能ハサル所ナリ例ヘハ毆打創傷ノ重罪ニ於ケル通常ノ輕罪ニ於ケルカ如キ是レナリ

第一百条及ヒ追加ノ条項

余ハ第一百条ノ次ニ新条ヲ加ヘラレタル所以ヲ解セス須ラク先ツ同条ノ第二項ヲ削除ス可シ然ラサレハ事矛盾ス可シ

第一百二条

余ハ本条ノ事項ヲ解釈スルニ難メリ第一百二条ノ本文ハ既ニ奇異ナリシカ今ヤ姑ク余カ了解スル所ニ從テ論スレハ妄昧ニ非サレハ之カ原則ニ悖戾スルモノト思惟セラル

法官ハ余ニ比スレハ更ニ聰明伶俐ナルヤ疑ヲ容レス

第一百五条

公布刑法ノ明文ニ於テ教唆ニ関スル本質ノ一部ヲ削除セラレタルハ甚タ不可ナリシカ今ヤ之ヲ復セラル、ニ於テハ余ハ賛成セサルヲ得サルナリ

第一百十条

第二項ヲ削除シ而シテ其条件ヲ共犯ノ章中（第百六条）ニ移サレタリ是レ順序ヲ失スルモノト云フ可シ

第百十一条乃至第百十三条

今回改正ニ際シ本条ニ於テ草案條款ノ全部又ハ一部ヲ復スルコトヲ得タリシナランニ其正確ナルト精密ナルトニ依テ最モ較著ナリシ此ノ諸條款ヲ残害セラル、ニ至レリ

第百十四条

刑法ニ明記セラレタルヲ以テ奇異ト為セシ所ノ親屬例ニ関スル本条ヲ削除セラレタルハ余ノ十分ニ賛成スル所ナリ

第一編總論

余ハ二三箇条ノ細目ヲ除クノ外ハ今回ノ改正ヲ悲歎ス可キモノト謂ハサルヲ得サルナリ其ノ細目ト雖モ亦甚タ緊要ノモノニ非サルナリ

公布刑法ハ業ニ既ニ其寬嚴宜ヲ失スルモノニシテ而シテ之ニ二箇ノ殊別ナル趣旨アルヲ見ルニ足ル則チ一ハ単ニ一人若クハ同一合力者ノ事業ニアラサルコトト又一ハ學術上ノ原則ヲ含有スルモ許多ノ点ニ於テ残害變性セラレシコト是レナリ今ヤ其ノ性格モナク學術上ノ価値モナク又實際上毫モ益スル所ナキノ事業タルニ過キス故ニ欧米各國ノ法律家中之ヲ讚称スルモノハアラサル可シ其輕率ニ放擲セラレタル草案ヲ閱覽シタル者ノ如キハ一層之ヲ非認スルニ至ラン

第二編

先ツ公布刑法ノ明文ニ於テハ全ク草案ニ乖戾シ天皇皇后ニ対シ犯セル重輕罪ニ付キ現出スルヲ得可キ至重ナル犯罪ノ各種ノ區別ヲ削除シタルコトヲ爰ニ注意セサル可ラス然ルニ此点ニ付テハ修正案ノ明文ニ於テ之カ不備ヲ補充セラレサルモノ、如シ

第一章

本章ノ題號ハ大ニ其当ヲ失セリ

第百十六條

皇室ニ対シ悖逆ヲ謀ルトハ如何ナル意義ナルヤ明瞭ナラス悖逆ヲ遂ケ若クハ試ミタルトナレハ其意ヲ解ス可シト雖モ悖逆ヲ謀ルトノ文字ハ了解スル能ハサルナリ

蓋シ恐クハ之カ企図ヲ組成シタルトノ意ナルカ果シテ然ラハ企図シタルト記載ス可キナリ

若シ果シテ此ノ如キ意義ナリトスルトキハ法律ノ總則ニ反スルモノトス何ントナレハ単ニ企図ノミニテハ既遂又ハ未遂罪トシテ之ヲ罰スルコト能ハサレハナリ

前文ノ如クナレハ理ニ悖ルコト少ナシトス蓋シ犯人ノ之カ限界ヲ超過セシヤ否毫モ之ヲ証スルモノナキヲ以テナリ而シテ其ノ之ヲ得タルトキト否トヲ問フモノニ非ラス將タ社会ノ之カ為メ害ヲ蒙ルコト鮮少ナル可シ

今如何シテ其企図ヲ証スルヤトノ問題ヲ生ス可シ若シ一ノ嫌疑若クハ推測ノミニ依テ之カ刑ヲ科スルヲ得ルモノトセハ甚タ危険ナル結果ヲ生ス可キヲ以テ責メテハ賛成ヲ得サル陰謀ノ發言ナル文字ヲ假定セサル可ラス然レトモ既遂罪ノ刑ヲ以テ之ヲ罰スルハ不条理ノ事タルヲ免カレサルナリ

此ノ如キ條款ノ單タ一箇ニテモ存スルトキハ日本刑法ハ遂ニ世界中最モ野蛮ナル法律中ニ排置セラル、ニ至ル可シ

第百十六條ノ下追加

本条ノ下ニ追加セラレタル新條款ニ就テモ同一ノ批評ヲ下サ、ルヲ得ス則チ皇陵ヲ毀壞スル者ヲ死刑ニ處スルノ事是レナリ

実ニ墳墓ヲ發掘スルノ事タル何レノ場合ヲ論セス之ヲ重罰ス可キモノナリ況ンヤ事皇陵ニ渉ルモノニ於テオヤ但シ之カ為メニ第二百六十五條中ノ一箇ノ條項ヲ附加スルヲ以テ足レリトス

然レトモ本条ノ場合ニ於テ死刑ヲ科スルハ皇祖ノ一山陵ヲ汚辱スルノ罪ヲ以テ天皇ノ身体ニ対スル逆罪ニ比スルモノナリ之ヲ詳言スレハ道德ニ関スル害ト社会ニ関スル害トノ二事ニシテ全ク二個ノ異ナレル事実ナレハ識者ヲシテ日本立法官ハ刑法ノ原理及ヒ刑例ノ基礎ヲ弁識セサルモノト思ハシムルニ至ル可シ

又之ト同時ニ此重罪ノ実ニ存スルモノニ非サル可キヲ想ハシム可シ蓋シ恐ラクハ皇陵ヲ毀壞スルノ例ハ之レアラサリシナラン

之ヲ要スルニ嘗テ皇陵ニ対シテ幾箇ノ干犯ヲ加ヘ以テ其中ニ含有シ若クハ賊ノ含有スルコトヲ思量セシ所ノ貴重ナル物品ヲ剽窃セシコトアリシヤ

毀ツノ文字ハ不分明ナリトス何ントナレハ毀壞ト單ニ干犯トノ區別判然タラサレハナリ

却説余ハ第十六条ニ付キ注意ヲ惹ント欲スル所ハ公布刑法ノ天皇ノ身体ニ対スル逆罪ノ刑ヲ微弱ナラシメタルニアリ草案(第三十一条)ニハ弑親罪ノ刑トアリ是レ法律上犯人ニ対シテ嚴肅ナル効驗ヲ示スモノナリ然ルニ單ニ死刑トノミ掲クルニ於テハ之カ効驗ナシトス

第百十七條

本条ニ於テハ皇室ニ対スル不敬ノ所為ニ付其情重キ者ハ懲役ノ重罪刑ヲ科スルコトヲ許セリ此文字ハ獨リ公布刑法ニ於テ屢々記スル所ニシテ草案ハ一モ之ヲ載スルコトナキナリ

爰ニ至リ裁判官ニ委任シタル權力ノ実ニ至大ナルヲ見ル

此ノ如クンハ第二条ノ原則ヲ如何センヤ

抑モ加重ノ情狀ヲ確定スルハ立法ニアレトモ酌量減輕ハ裁判官ノ司ル所ナリ而シテ其評定ニ委スルヲ要ス是又今回ノ改正ハ法律家ノ事業ニ非ラストノ冷評ヲ招クノ一原因タル可シ

第百十八条

本条ニ於テハ加ヘントシタル（未遂罪）ノ文字ヲ謀ルニ改メラレタリ卑見則チ前条ニ同シ

第百十九条

本条中罰金ヲ除キタルハ如何ナル故ソヤ

此点ニ付テモ加重ト均シク又減輕ヲ非トス

第二節

各種ノ節目ヲ転倒シタルヲ以テ見レハ修正者ハ其順序ノ何物タルハ毫モ之ヲ解セサルモノ、如シ

第二百一十条第二項第三項

此条項ニ於テ再ヒ裁判官ニ専断權ヲ附與シタルヲ見ル則チ「其情輕キ者」トアルコト是レナリ
乃チ此場合ニ於テハ又再ヒ酌量減輕ヲ認許スルヲ得可シトスルヤ

第二百一十三条

法章中謀反ナル文字ハ不適當ナリ須ラク此語ヲ以テ国家ノ機密ヲ敵国ニ漏泄シ若クハ其邦土ヲ交附シ又ハ其防禦ノ方術ヲ通牒シタル真ノ謀反ニノミ附スルヲ要ス

又或ル外国ノ法制ニ從ヒ内乱ニ関スル罪ヲ稱シテ謀反大逆ト為スヲ得可シ然レトモ此語タル法律上ノ釈義ヲ附スルニ非サレハ明解スルコト能ハサルカユヘニ内乱、叛乱、兵器ヲ持シテ官命ニ抗スルコト等ノ数語ヲ用ユルニ若カサルナリ

第二百二十五条及ヒ第二百二十六条

此二條款ニ於テハ謀反ナル語ハ最モ不適當トス

第二百二十七条及ヒ追加ノ条款

此二条款ハ第二百二十一条ノ次ニ記載スルヲ可トス

第三節

本節ノ題號ヲ變換セシ者ハ其条款ヲ閲読セサリシヤ必セリ蓋シ之ヲ閲読セシナレハ此重罪ハ第三百三十三條ヲ除クノ外ハ日本ニ関スルモノニシテ外国ニ関スルモノニ非サルコトヲ知り得タルナル可シ

第二章第一節

本節ニ於テ又題號ヲ變換セラレタル所以ハ如何蓋シ其罪タル兇徒嘯聚ヨリハ寧ロ官府ニ抗スルノ罪タルヤ明ケシ

第一節 (第二百二十八条ノ下追加)

本文ニ於テハ僅ニ一條款ノ為メニ一節ヲ設クルモノニシテ其軍隊ヲ組織スルノ所為タル犯人ノ予期セシ所ノ目的ト離ル可ラサルヲ悟ラサルモノ、如シ若シ其主意トスル所外國ト干戈ヲ交ユルニアランカ第三百三十三條ヲ適用ス可シ若シ又内乱ヲ起シ政体ヲ變革シ其他國ノ安寧ヲ害スル重罪ナレハ此重罪ノ予備ノ犯罪トシテ罰スルヲ得可キナリ (第二百二十五条參看)

第四百四十条

当初刑法ヲ頒布セラル、ニ當リ国事犯ニ関シ草案載スル所ノ死刑ヲ廃止セラレサリシハ遺憾ト為ス所ナリ今ヤ死刑ヲ濫用セラル悲酸ニ堪ヘス

第一百十六條以下本條ニ至ル迄ニ已ニ其場合ニ箇アリ

第四百四十一条ノ下追加

今回ノ修正中此條款ヲ措テ多ニ充分賛成ヲ要ス可キモノナシ但シ之ハ草案 (第七十條) ニ復シタルニ過キス蓋シ官吏

不正ノ所為アルニ際シ其事實ヲ証明スルコト能ハサリシハ厭嫌ス可キノコトトス
此ノ如クシテ始メテ人民ハ政府ノ其吏員ノ惡弊若クハ不正ノ舉措ヲ不問ニ措クニ当リ輿論ノ圧力ニ依テ之カ賠償ノ手
段ヲ得可シ

第四百十二条

余ハ改正ノ法典（公布刑法ヲ云）中獄舎ヲ毀タス又ハ暴行脅迫ヲ為サスシテ単ニ逃走シタル囚徒ヲ罰スルノ事ヲ厭嫌ス
可キモノト為セリ今ヤ又獄舎ヲ毀チタル者ニ輕懲役ノ刑（重罪刑）ヲ科セントスルハ更ニ厭嫌ス可キコトトス蓋シ罪科
ト刑罰ト相應セサルヲ以テナリ

蓋シ此加重ハ其ノ因テ起ル所以アル可シ則チ囚徒ノ看守宜ヲ得サルトキハ逃脫ヲ謀ル自然ノ理ニシテ素ヨリ怪シムニ
足ラス元來處刑ナル者ハ契約ニ非サレハ囚徒ノ獄舎ニ閉居スルコトヲ自ラ誓約スルモノニ非ラストス

若シ夫レ失火洪水ノ災厄ニ遭遇シ一時囚徒ヲ放釈シ約スルニ危難終ルノ後ハ再ヒ入獄スルノコトヲ以テスルカ如キ場
合ニ於テ囚徒ノ之ヲ遵守セサルトキハ此刑ヲ科スルモ妨ケナキナリ是レ官府ハ囚徒ヲシテ一大危難ヲ避ケシメ以テ其
身命ヲ救助セン為メニ放釈スルモノニシテ之ヲ遵守セシム可キノ約束ヲ立ツルカ故ナリ

此場合ヲ外ニシテハ囚徒ノ逃走ヲ妨カント欲セハ宜シク其看守ヲ嚴ニス可シ蓋シ獄舎ナル者ハ其窓戸ヲ閉鎖シテ其監
守ヲ嚴密ナラシメン為メニハ許多ノ費用ヲ要スルモノナレハ寧ロ懈怠ナル看守人ヲ罰スルモ油断セサル囚徒ヲ罰スル
勿レト言ハント欲ス

第四百十三条ノ下追加

本条ト共ニ死刑ヲ用ユルノ場合ハ三回ニ至ル今其罪ヲ見ルニ獄舎ノ毀壞タルニ過キス
嗚呼一鎖鑰ノ代価モ亦非常ニ高貴ナリト云フ可シ

夫レスノ如キ場合ニ於テハ囚徒ハ一名乃至数名ノ看守人ヲ殺害シ若クハ獄舎ニ放火スルニ非サレハ止マサル可シ何ントナレハ再度鎖鑰ヲ毀壞シタルカ為メニ死刑ニ處セラル、ヲ以テ到底得ル所アルモ毫モ失フ所ナケレハナリ

第四百十六條及ヒ第四百十七條

本條ノ嚴酷ナルハ素ヨリ前條ノ結果ニシテ自然ノ理ナリ之ニ付キ別段注意ヲ要セス

第四百十八條

豫メ謀テ人ヲ殺スノ罪タル已ニ死刑ヲ科スルモノトシタルニ如何シテ之ニ一等ヲ加フルヲ得ルヤ了解スル能ハス
草案第百六十四條ニ於テハ此ノ如キ大失策ハナキナリ

第七節第百七十三條ノ下追加

嘗テ公布刑法ニ於テ浮浪ノ罪ニ関スル刑例ヲ削除セラレタルハ如何ナル理由ナルヤヲ知ラサリシカ今ヤ之ヲ回復セラレントスルハ頗ル美舉ナリト云フ可シ

第百七十八條

第二項ニ関シテハ別ニ異論ナシト雖モ第一項ニ於テ逃走ヲ身体ノ毀傷ト同一視スルハ大ニ不可ナリ蓋シ逃走シタル者ハ其役ニ堪ユルヲ得ルカユヘ其害タル至大ニアラサレトモ身体ヲ毀傷シタル者ニ至テハ然ラサルカ故ニ他人ヲシテ之ヲ負ハシムルニ至ラン

第二百一條

本條ニ付テハ別ニ異論ナシ

第二百三條

本條ハ裁判官ヲシテ其情輕キ者ナル辭柄ニ依テ刑ヲ變更スルノ自由ヲ得セシムルモノナリ然ルニ酌量減輕ノ明文ヲ載

セス是レ又悲嘆ス可キノコト、ス

蓋シ本条ノ場合ニ於テハ刑ノ最モ輕キヲ科スルヲ以テ足レリトス但シ至重ノ刑ヲ科シ後チ之ヲ輕減スルカ如キハ策ノ得タルモノニ非サレハ初メヨリ重刑ヲ科セサルヲ可トス

第二百五条ノ下追加

本条ハ極メテ非ナリ何ントナレハ偽造ノ文書ヲ行使シタル者ヲ以テ偽造行使ノ二罪合併ノ如ク之ヲ罰スレハナリ此二件ヲ第二百三条第二百四条及ヒ第二百五条ニ合併スルハ徒勞ニ属セリ

第二百八条

本条ニ於テモ亦私印ノ偽造及ヒ其使用ヲ罰セリ

第二百九条及ヒ第二百十条ノ下追加

第二百九条ニ於テハ二種ノ重罪ヲ合併シタル刑ヲ科スレトモ第二百十条ノ追加ニ於テハ単ニ行使ノ罪ノミニ付キ之ヲ科セリ是レ論理及ヒ順序ヲ失スルモノトス

第二百十六条ノ下追加

囑托ヲ受ケノ文字ハ無益トス何ントナレハ或人ノ有罪ナル文字ヲ之ニ記載スルヲ要スレハナリ

第二百六十条

余ハ本条ニ於テ遊戲者ノ結合ヲ創立スル者又ハ其魁首〔日本刑法ニ所謂「招結シタル者」ノ文字ハ創立者又ハ魁首ヲ指称スルモノト思ハル〕ニ向テ輕懲役ノ重罪刑ヲ科スルハ非常ニ嚴酷ナリト信ス〔按スルニ刑法ノ譯文中單ニ遊戲者トアリテ博徒トナシ是本論ノ因テ起ル所以ナル可シ〕

抑モ遊戲者ノ結合トハ如何ナル者ナルカ其ノ時々自宅ニ集会シテ遊戲ヲ為ス者ノ如キハ之ヲ稱シテ結合ト為スヲ得ル

カ

今利益ヲ共ニスル為メ外国人ニ遊戲ヲ供スル者ヲ指シテ云ント欲スルカ是レ大ナル錯誤ト云フ可シ
依テ此事タル裁判官ニ至大ナル專斷權ヲ附与スルモノトス

余ハ又賭場ヲ開帳シテ利ヲ図ル者ニ輕懲役ノ刑ヲ科スルハ過嚴ナリト信ス

此条項ニ據レハ博徒招結ノ場合ノ如キハ利ヲ図ルニ非ストノ考案ヲ生スルニ至ル可シ然ラサレハ招結ト否トヲ區別ス
ルノ益ナケレハナリ

今朋友ノ一社会アリテ其一人ノ宅ニ寄合ヒ或ル遊戲ヲ為サントスル者アリト假定センニ此事タル多少貴重ス可キノ自
由權ニ屬スルヲ以テ法律上ニ干涉束縛ス可ラサルモノトス

余ハ巴里府下ニ之ニ類スル集会アルコトヲ知ル然レトモ未タ嘗テ官府ノ之ニ干涉セシコトアルヲ聞カス

蓋シ之ヨリ有益ノ事ニ於テ利ヲ図リ財貨ヲ増殖スルノ道アル可シ其故如何ントナレハ前文ノ如クナレハ富ヲ交換スル
ニ過キスシテ之ヨリ産スル所ナケレハナリ然リ而シテ此事ハ罰スルノ限ニ非ラス

又日本風ノ集会ニ於テ酒ヲ飲ミ肴ヲ喫シ三絃ヲ彈セシムルノ事ハ素ヨリ法律ノ問フ所ニ非サルコト論ヲ俟タス

其他本条ニハ遊戲者ノ金錢ヲ賭スルヤ否ヲ區別セサルナリ

修正ノ立案者ハ此等ノ事ニ注意セサル可ラス

第二百六十一条

本条中通常賭博者ニ対スル現行犯ノ条件ヲ除キタルハ余ノ大ニ痛惜スル所ナリ

人若シ賭博ノ一事ノ為メニ其公訴期滿免除ニ至ルノ間(即チ三年間)嘗テ放逐シタル雇人又ハ恨ヲ含メル者ノ或ハ惡意
ニ出テタラン所ノ告発ニ由リ隨時搜索セラル、コトアランニハ其国民ノ安寧ニ対シ危害アルコト蓋シ實ニ鮮少ナラサ

ルナリ乃チ治薬ノ害、賭博其者ノ病毒ヨリ甚キコト却テ百倍ナリト謂フヘシ

余又茲ニ本条ニ於テ人ノ特ニ金錢ヲ賭スルノ博奕ト掲クルヲ見其前条ニ於テハ人ノ之ニ注意セサリシヲ見ルナリ

故ニ前条ノ場合ニ於テハ玉突「クリツケット」〔擲玉戲ノ一種〕「タウン、テンニス」〔亦タ同上ノ別種〕囲碁及其他闘智、競巧、角力等ニ関スル諸遊戲ノ会合ノ如キ人亦之ヲ罰スルコトヲ得ヘシ

夫レ臣屬ヲシテ政府ニ離心ヲ生セシメ又国民ヲシテ国ニ怨望ヲ懷カシムルモノ法ノ暴虐ヨリ甚キハナシ即チ今論スル所ノ場合ノ如キ實ニ是レ法ノ畛域ト道德ノ畛域トヲ混同スルモノト謂フヘキナリ

蓋シ風俗ノ矯正ハ之ヲ禁遏ノ法律ニ仰クヘキモノニアラスシテ一ニ童幼ノ薰育、至善ノ奨励、公德私德ヲ行フテ温厚篤実ノ行狀アル人々ニ賞与ヲ賜給スル等ノ事ニ由ラサルヘカラサルナリ

人夫レ今無害ナル遊戲ヲ為シ僅ニ數錢ヲ賭スルモノヲ罰シ而シテ金穀公債等ノ相場ヲ為シ千金萬鎰ヲ賭博スルモノハ措テ之ヲ問ハサルモノ抑モ亦タ当ヲ得タリト云フヘキカ

余前文ニ於テ本条賭博ノ事ニ就テハ其治薬ノ害却テ之カ病毒ヨリ甚キコトヲ述ヘタルモノ蓋シ唯タ此事ノ民人ノ私生ヲシテ窮糺苛察ナル警察ノ害迫ヲ被ラシメンコトヲ恐ル、カ為メノミアラスシテ亦タ大ニ貴政府ノ之カ為メニ六年乃至九年ノ間社会ヨリ拉取シ永年懲役ニ服セシメタル後此刑ノ為メニ之カ性情ニ敗壞ヲ与フル其受刑ノ前ニ百倍ナラシメ以テ遂ニ之ヲシテ其法律ノ不正ナルヲ覺ラシメ〔蓋シ此等ノ事ニ就テハ人民ノ判断敢テ法律家及道德家ニ譲ラサルナリ〕曩キニ之ヲ懲罰シタル社会ノ仇敵タラシムルニ至ル所ノ人々ヲ杞憂シ又タ貴政府ノ此ニ無心ニシテ自己ノ財貨ヲ賭博スルニ過キサル人々ニ替ユルニ憚ル所ナク怕ル、所ナク人ノ財貨ヲ奪掠シ且ツ恐ラクハ人ノ生命ヲモ残害スルニ至ルヘキ所ノ兇人ヲ有スルニ至ランコトヲ苦慮スルヲ以テナリ

貴政府法律ノ結果タルヤ其レ實ニ此ノ如シ而シテ今之ヲ以テ例ヲ示シ他ヲ戒メントスルカ如キハ余ノ毫モ望ヲ屬セサ

ル所ナリ何トナレハ抑モ刑律ナルモノハ一般ノ賛成ヲ得、公衆良心ノ同議ニ由テ固立セルモノニ非サル以上ハ風俗ヲ矯正シ情欲ヲ熄滅スルニ足ラサルモノナレハナリ

第二百六十五条

余ハ皇陵ヲ発掘シタル者ヲ處スルニ通常墳墓発掘ノ罪ニ一等ヲ加ヘント欲ス而シテ之ヲ本条ニ追加セント欲ス蓋シ往キニ草案ニ於テハ此ノ如ク掲ケ置キシニ全ク印刷ノ際寫字生ノ疎漏ニ由テ脱落セシナリ

第二百八十四条、第二百八十五条、第二百八十九条、第二百九十条

此四条皆ナ異論ナシ蓋シ官吏ノ其職務ヲ欠クハ通常人ノ其各自ノ義務ヲ欠クモノニ比スレハ其社会ニ害悪アルコト極テ大ニシテ其之カ為メニ民庶ニ危懼ノ念慮ヲ懷カシメ且官府ノ信用ヲ失ハシムルニ至ルヲ以テナリ

第三編

第二百九十四条

本条ハ本節中死刑ヲ掲ル諸条ノ前又ハ後ニ置カサルヘカラス余ハ寧口之ヲ本節ノ冒頭ニ移サンコトヲ望ム

第二百九十九条

本条中故意ヲ以テノ字ハ之ヲ存センコトヲ要ス故意ヲ以テ之ヲ犯スノコト即チ其重罪又ハ輕罪ノ成立元素タルヲ以テナリ

本条中又タ死ニ致シタル云云トアルノ上ニ之ヲ死ニ致スノ意ナクシテノ数字ヲ加ヘサルヘカラス

此条ハ草案第三百三十四条ヲ割裂變更シタルモノニシテ其不完ノ條款タルハ既ニ久ク人ノ知ル所ナリ今ヤ則チ此一大過失ヲ補修スルノ時機ト謂フヘシ

第三百一条

異論ナシ

第三百十三條

本条ハ草案(第三百四十九條)ニ復シタルモノナルヲ以テ異論ナシ

第三百二十六條

誹毀ノ脅迫ヲ殴打創傷ノ脅迫ト均シク論スルハ恐ラクハ少シク失当ナランカ何トナレハ誹毀ノ事タル人ノ榮譽ニ脅迫ヲ与フルモノタルヤ疑ナシト雖トモ而モ其被害者ハ誹毀者ヲ告訴シ之ヲシテ誹毀ノ刑ヲ受ケシムルコトヲ得ルカ故ニ其害悪タル身体ノ損傷ニ比スレハ遙ニ補修スルニ容易ナルヲ以テナリ然レトモ余強テ異論ヲ唱フルコトヲ為サス

第三百二十九條

公衆ニ対スル脅迫ハ政府官吏ノ其警察權ヲ行フ時ニアラスンハ之レアルノ理ナシ本条謂フ所ノ脅迫トハ何等ノモノヲ云フカ余之ヲ解スルコト能ハス

第三百三十八條

異論ナシ

第三百五十一條

本条中過当ノ加重ニアリ

一、強姦ニ因テ篤疾ニ致シタル者ハ無期徒刑ニ處スト知ラス第三百條ニ掲クル殘疾ヲ外ニシ篤疾ト稱スルモノハ何カ
二、強姦ニ因テ死ニ致シタル者ハ死刑ニ處スト而シテ其之ヲ死ニ致スノ意アリテ犯シタルト否トヲ問ハス若シ犯者ニ於テ毫モ之ヲ死ニ致スノ意ナカリシ時ニ於テモ亦タ均ク之ヲ死刑ニ處スルカ如クンハ是レ實ニ苛酷ニ過クルノ甚キモノニシテ抑モ亦タ刑律ノ諸原則ヲ干犯スルモノト云ハサルヲ得サルナリ

第三百五十八條

異論ナシ

第十三節

本節原ト祖父母父母ニ対スル罪トアリタルヲ今回、祖父母父母及子孫ニ対スル罪ト改メラレタルヲ見ルハ余ノ大ニ驚訝スル所ニシテ今此追加ノ理由ヲ本節ノ諸條款ニ求ムルニ唯タ祖父母父母ノ不論罪ヲ掲クル一條ヲ見ルニ過キス夫レ唯タ此一條アルニ過キスシテ本節目ヲ分開シ之カ名称ヲ改ム実ニ奇怪ト云フヘシ

第三百六十二條

修正ノ立案者ハ新ニ死刑ヲ掲クル場合ニ於テ常ニ其當ヲ得ス本条ノ如キ亦タ其一ニ屬ス蓋シ子孫ノ祖父母父母ノ自殺ニ与カリタル場合ニ於ケルカ如キ其罪決シテ其祖父母父母ニ於テ自ラ命ヲ絶タントスルノ意望ナキニ之ヲ死ニ致シタルモノ、如ク其レ兇惡ナラサルナリ

然リト雖モ子孫ノ祖父母父母ニ相続センカ為メ又ハ之ニ代ランカ為メ又ハ之ニ対スル負債ヲ免レンカ為メ之ヲ自殺セシメタル場合ニ限リテハ死刑ニ處セサルヲ得サルヘキ歟

第三百六十三條

是レ亦タ第一回ノ改正ニ由テ腐癥ニ屬シタル一條款ニ係ル而シテ其常ニ死刑ノ不当ニ宣告セラル、ヲ見ルモノ実ニ痛惜ニ堪ヘサルナリ

夫レ故意ニ出テタル殴打創傷ニ因リ之ヲ死ニ致スノ意ナクシテ死ニ致シタルモノ、如キハ決シテ死刑ニ處セラルヘキモノニ非サルナリ若シ然ラスンハ此罪ト彼ノ直接ニシテ且ツ故意ニ出テタル殺人罪トノ間、毫毛相異ナル所ナク均ク共ニ死刑ヲ免レサルカ故ニ今論スル所ノ犯者ノ如キ寧ロ被害者ノ生命ヲ絶タン方、告発ヲ防キ刑戮ヲ避クルノ好手段

タルヘキヲ以テ勢ヒ皆ナ事ヲ故殺ニ取ルニ至ルヲ免レサルヘキナリ

第三百六十四条

亦タ是レ均シク原則ニ反シテ死刑ヲ宣告セルノ一条款タリ

第三百六十五条

本条ハ法律家ノ至巖ナル判断ヲ免レサルノ条款タリ須ラク之ヲ削除センコトヲ要ス

試ニ問ハン十四歳以下ノ未成年者又ハ聾啞者ノ弑親罪ハ成年者ノ弑親罪ノ如ク是レ兇惡ナルカ

又タ正当防衛ノ場合ニ於ケル弑親罪ハ一ノ權利ヲ行フモノニアラサルカ

又タ白痴者ノ弑親罪ハ罪スヘキモノナルカ

第三百六十五条追加ノ甲

養女又ハ媳婦ノ弑親罪及其他ノ犯罪ニ対シ實女ト同一視セラル、ハ余ノ決シテ是認セサル所ナリ然レトモ是レ日本風習ノ然ラシムル所ナルカ故ニ余敢テ之ニ異論ヲ唱ヘサルナリ

第三百六十五条追加ノ乙

本条ハ無用ニ屬ス削除セラレンコトヲ要ス

第三百六十六条追加

看守者及水上運送人ノ場合ノ如キハ受寄財物ニ関スル罪ヲ犯スノ場合ト認メサルヘカラス決シテ盜罪ニ屬スルモノニアラサルナリ故ニ本条ニ於テハ法ノ誤謬アリトス

即チ今茲ニ為スコトヲ得ヘキモノハ唯タ受寄財物ヲ費消シタル罪ニ一等ヲ加フルノコト是レノミ

第三百六十八条

按スルニ本条中鎖鑰ヲ開キトアルハ必ス其相当スル所ノ日本語ヲ誤譯シタルモノナルヘシ何トナレハ唯タ鍵ヲ以テ鎖鑰ヲ開クカ如キハ其情狀敢テ門戸墻壁ヲ損壞スルカ如ク重大ナラサレハナリ故ニ本文必ス偽鍵ヲ以テト謂ハント欲シタルヲ誤テ脱落シタルモノナルヘシ

且夫レ損壞、踰越、偽鍵等ノ事ハ皆ナ是レ加重ノ情狀ト認メンコトヲ要ス決シテ特別盜罪ノ成立情狀ト認ムヘカラサルナリ

第三百七十條

強盜ニ非サルノ盜罪ヲ重罪ノ刑ニ處スルハ余ノ大ニ躊躇スル所ナリ

夫レ抑モ凶器ヲ携帯スルノ事實アルモ其之ヲ用テ脅迫ヲ為サル以上ハ未タ之レ強盜タラサルナリ

且夫レ所謂竊盜罪中ニ重罪ノ場合ヲ見ルニ於テハ盜罪二種ノ別何ノ為メニカ之ヲ存スルコトヲ要セン寧ロ佛國刑法ニ於ケル如ク諸般ノ盜罪ヲ順次列記スルヲ以テ優レリトスルナリ

第三百七十二條、第三百七十三條、第三百七十四條

此三條ハ何等ノ理由アリテ削除セラレタルモノカ余之ヲ解セス

第三百七十八條

公布刑法ニ於ケル如クニ懲役ヲ存スルニ於テハ本條ノ刑ヲ重クスルニ就テ異議ナシト雖モ若シ草案ニ復スルニ於テハ本條輕懲役ニテ足レリト信ス

第三百七十九條

本條ニ於テ草案(第四百二十五條)ノ加重情狀ヲ復シタルモノハ余ノ贊成スル所ナリ然リト雖モ余ハ仮面ヲ被フリ又ハ手巾ヲ用テ覆面スルノ場合ヲ復セサリシコトヲ憾ム何トナレハ此情狀タル社會ノ一危害ニシテ其不罰ノ害タル実ニ少

小ナラサレハナリ

第三百八十条

本条モ亦タ是レ道理ニ原則ニ正義ニ社会ノ利益ニ反戾シテ死刑ヲ宣告セルノ一条款タリ
蓋シ日本ノ盜賊ハ巧敏ナリ彼レ若シ被害者ヲ創傷シタラン時ハ必ス將ニ之ヲ殺戮シテ其生命ヲ断ツニ至ラン何トナレハ彼レ之カ為メニ毫モ損失スル所ナク反テ全得アルヲ以テナリ

第三百八十一条

終始死刑ノ事ニ就キ法ノ誤妄アル歎スヘキナリ而シテ死刑ノ如キハ事ノ最モ原則ニ従ハサルヘカラサル所ノモノニ屬セリ

蓋シ強姦ハ惡ムヘキ罪犯ニシテ強盜ノ如キモ亦タ固ヨリ然リ、然リト雖モ此ニ罪タル各々別ニ之ヲ犯ス時ハ唯タ中等ノ刑ヲ科セラル、ニ止マレリ然ルヲ今如何シテ之カ合犯ニシテ死刑ニ至ルコトヲ得ヘキカ而シテ強姦ノ各種ノ場合ノ如キハ今之ヲ區別セサルカ殊ニ其被害者ノ年齢ノ如キモ亦タ今之ヲ問ハサルカ

第三百八十三条

本条ノ如キハ余、輕懲役ニテ足レリト信ス何トナレハ藥酒ヲ使用スルノ事タル其横逆甚シカラスシテ危險モ亦甚タ大ナラス随テ其道徳上ノ害惡ヲ為シ社会ノ害惡ヲ為スコト多カラサルヲ以テナリ

第三百八十三条追加ノ甲乙

此追加ノ二条中甲条ハ穩当ニ草案(第四百二十七条)ニ復セルモノナリ

乙条ハ其草文甚タ拙ナリ而シテ抑モ盜賊ニ関スル予備ノ行為ヲ罰スルニ於テハ極メテ非ナリトス而シテ若シ己ニ盜ヲ犯サントシ其未タ遂ケサルモノナルニ於テハ本条ハ不用ニ屬セリ

第三百八十五条

物品発見者ニハ其発見物ノ半價ヲ給与スルコト恰モ彼ノ埋藏物発見ノ場合ニ於ケルカ如キ奇異ナル思想ノ存スル国ニ於テハ本条ノ刑タル少シク苛酷ニ過クルノ嫌ナカラシム

第三百八十八条

本条ハ草案(第四百三十二条)ニ復シタル條款ナリ

蓋シ要スルニ今回ノ改正タル凡テ刑ヲ嚴ニスルニ就テハ好テ草案ニ復シ其之ヲ寛ニスルニ就テハ敢テ否ラサルナリ

第三百九十条

本条中罰金ノ員額ハ多少論難スヘキモノニ係ル他ノ罰金ト比較シテ之ヲ考察セハ蓋シ思ヒ半ニ過キン

自ラ弁償スルコト能ハサルヲ知テ飲食ヲ為シタル者ノ如キ人之ヲ此所ニ加ヘテ本条ヲ草定シ得タリシナラン此事タル蓋シ既ニ久シク人ノ論議スル所ニシテ佛国ノ如キハ現ニ特別ニ之ヲ懲罰セリ

第三百九十五条追加

本条ハ草案(第四百三十八条追加)ニ復セルモノナリ

第三百九十九条及其第一項

異論ナシ

第四百七条

本条唯タ自己ノ住居スル云々ト掲クルノミニテハ思フニ其之ヲ犯ス者ハ死罪ニ至ルヲ免レサルヘキ歟故ニ此嫌ナカラシカ為メニハ宜ク自己ノミ住居スル云々ト掲ケサルヘカラサルナリ

第四百七条追加

余ハ本条ノ目的何レニアルヲ解セス且ツ大ニ其草文ノ不是ナルヲ覺ユ

第四百十三條

異論ナシ

第四百二十五條第九項第十項

此二項ハ何等ノ理由アリテ削除セラレタルモノカ余之ヲ解セス

蓋シ暴行ハ其何タルヲ問ハス皆ナ凡テ罰スヘキモノナリ

且ツ思フニ賭博ニ対シ極メテ苛酷ニシテ或ハ之ヲ輕罪ニ問ヒ或ハ之ヲ重罪ニ問フコトアル所ノ立法家ニシテ何ソ密売淫ヲ不問ニ置クノ理アランヤ亦タ宜シク之ヲ輕罪ニ問フヘキナリ蓋シ知ラス或ハ特別ノ法律ヲ以テ之ヲ定メタルモノカ果シテ然ランニハ寧ロ之ヲ刑法中ニ移シ公衆ノ健康ヲ害スル罪条中ニ掲クルニ如カサルナリ

第四百二十九條第五項第六項

此二項ノ削除セラレタルモノ余亦其理由ヲ解スルコト能ハス

今回下附セラレタル所ノ修正案ニ対スル鄙見茲ニ至テ終ル余乃チ左ノ一言ヲ述ヘテ之ヲ約言セントス曰ク今回、余、受ル所ノ感觸ハ從來日本諸法制ノ審案ニ於テ受ケタリシ所ノモノ、中ニ就キ最モ至難ナルモノ、一ニ屬セリト而シテ此事ノ外、余、口ヲ緘シテ言フコトヲ為サス蓋シ多少、自愛心ヲ毀傷スルニ非レハ敢テ弁論スルコト能ハサルヲ以テナリ

余切ニ此修正案ノ不良ノ結果ナカラント希望スト雖モ如何セン本案ノ如キハ啻ニ国内ニ於テ痛惜スヘキノ結果ヲ

生スルノミナラス亦タ必ス各国公使ヲシテ裁判権ノ点ヨリ別ニ論議ヲ為スコトナクシ断然条約改正ノ再議ヲ拒絶スルニ至ラシムルノ悲哀スヘキ應驗ヲ来タサンコトヲ是レ余ノ深ク恐懼シテ止マサル所ナリ

千八百八十三年七月八日

ジエ、ボアソナード記

意見書端首ヨリ第二百六十条ニ至ル

曲木 如長 譯

書簡及意見書第二百六十一条以下

緒方重三郎 譯

拝啓陳ハ曩ニ刑法中改正ニ係ル条項ニ付貴見及諮問候處本月九日附ヲ以テ御答ヲ辱シ銘謝ニ堪ヘス査評書逐一拝見致候處覆藏ナク高論卓説ヲ縷述セラレ大ニ参考ノ資料ヲ得幸甚ノ至ニ存候御論議ノ点ハ猶篤ト評議ヲ盡シ申スヘク候然ルニ当初諮問ニ及候節修正ノ各条ニ理由ヲ付セサリシ為メ其何等ノ主旨ニ出テ修正シタルモノナルヤ御了解無之条件モ間々有之哉ニ相見ヘ其儘打捨置候ハ甚タ以テ不本意ノ至ニ存候間茲ニ別紙ヲ以テ右不明瞭ノ条件ニ対シ理由ノ大畧ヲ記セシメ御覽ニ入候間右ニテ御了解相成度候敬具

明治十六年 月 日

參議山縣有朋

ジエ、ボアソナード貴下

第十一條

刑ノ執行ニ関スル規則ハ明治十四年十二月第六十七號布告ヲ以テ制定セリ之ヲ刑法附則ト謂フ其目ハ第一主刑執行
第二監視第三仮出獄及ヒ特別監視第四裁判費用第五賠償処分ニ関スル規則是レナリ

第七十五條

抑モ刑法ハ德義名教ト相悖ル可ラサルモノナルニ本條ノ精神ヲ極論スレハ自己ノ禍害ヲ免レンガ為メニハ其禍害ヲ
他人ニ移スモ妨ケナキモノニシテ殺身成仁ノ義ト正ニ相反ス推シテ之ヲ言フ時ハ飢テ人ノ食ヲ奪フヘク寒ヘテ人ノ
衣ヲ奪フヘク死ヲ惡ムノ情ハ以テ他人ヲ陷害シ至ラサル所ナカルヘシ是レ乃チ德義節義ハ平常和易ノ日ニ行フヘク
シテ危害切迫ノ時ニ行フ可ラス而シテ人ノ禽獸ト相去ルコト幾何モナシ豈刑法ハ德義名教ヲ寓スルノ主旨ニ悖ルコ
トナキヲ得ンヤ是レ第本條ヲ削去スル所以ナリ

第九十八條

本條但書盜罪ニ限り三犯以上二等ヲ加フルモノハ刑事年表ニ徵スルニ犯罪中其最多キ者ハ盜罪ニシテ犯數ノ最多キ
者モ亦盜罪ナリ良民ニ害ヲ被ラシムル者盜罪ヲ以テ最甚シトス然ラハ之ヲ懲誡スルニ適合スル刑ヲ以テ罰セサルヲ
得ス是即チ實際ノ必要ヲ察シ三犯以上二等ヲ加フル所以ナリ其他ノ犯罪ハ未タ盜犯ノ如ク甚シカラス故ニ盜犯ト同
シク三犯以上二等ヲ加フノ例ヲ設ケス

第百條追加ノ條項

本條ヲ増補シタルハ禁錮ハ身体ニ對シ罰金ハ財産ニ對スル處ノ刑ニシテ其性質異ナルト又輕罪ノ刑タルヲ以テ二罪
俱發各刑ヲ併科スルモ過重ノ恐レナシトノ議ヲ以テ増補シタルモノナリ本條ヲ追加シテ輕罪ノ刑ハ其所犯情狀最重

キ者ニ從テ處断スノ項ヲ其儘存スレハ矛盾スルカ如クナレトモ畢竟本条ノ追加ハ該項ノ除例タルニ過キス併シ其後ノ評議ニ於テ此追加条ハ削除セリ

第一百六条

悖逆ヲ謀ルトハ悖逆ヲ遂ケ若クハ試ミタルモノヨリハ猶ホ少シク初歩ノモノニシテ即チ企図ヲ組成シタルノ意ナリ此ノ如キ意義ナルニ拘ハラス既遂罪ト同シク之ヲ罰スルハ法律ノ原則ニ背クガ如クナレトモ抑モ悖逆ノ罪ハ天位ヲ干犯シ宮闕ヲ毀壞スルノ類ニシテ罪大ニ惡極ル其未タ罪ヲ遂ケ若クハ試ミサルモ猶ホ之ヲ嚴刑シ痛ク禍源ヲ塞カサル可カラス故ニ已ニ行フト未タ行ハサルトヲ問ハス謀レハ即チ坐ス畢竟我カ国体上ヨリ論スレハ悖逆ノ罪ハ一種特別ノモノト為サ、ルヲ得ス

第一百九条

本条附加ノ罰金ヲ削除セシ所以ハ強テ減輕ノ主旨ニ出テタルニアラス皇室ニ對スル犯罪者ヨリ罰金ヲ徴シ之ヲ國庫ニ收入スルハ試ニ欲セサル事柄タルヲ以テナリ

第一百六十八条

本条ハ殴打創傷ノ各本条ニ照シ一等ヲ加フルモノナリ第二百九十九条ニヨル二人ヲ殴打創傷シ因テ死ニ致シタル者ハ重懲役ニ處ス豫メ謀テ人ヲ殴打創傷シ休業廢篤疾又ハ死ニ致シタル者ハ一等ヲ加ヘ有期徒刑ニ處ス殴打創傷ニ関スル諸条ヲ通覽スルニ死刑ヲ科スルノ条ナシ然ラハ本条ニ於テ殴打創傷ノ各本条ニ照シ一等ヲ加フトスルモ死刑ニ死刑ヲ科スルト謂フガ如キ不都合ハ之レナシト思考ス

第二百六十条

刑法正文ニハ博徒トアルヲ佛文中單ニ遊戲者ト誤譯シタルニヨリ本条ニ付異議ヲ起サレタルコトト思考ス博徒トハ

玉突圍碁其他闘智競巧角力ノ類ヲ謂フニアラス貨物ヲ賭スルノ博奕ニシテ奇偶ヲ以テ輸贏ヲ争フ者ヲ謂フ博徒ヲ招結スル者トハ其魁首即チ親分ヲ謂フ各地ニ横行シテ其猖獗ヲ極ム民害ノ最甚シキ者ナリ禁錮ノ刑以テ其罪惡ヲ懲ラスニ足ラス是レ輕懲役ニ入ル、所以ナリ

第三百七十二條、第三百七十三條、第三百七十四條

此三條ヲ削除シタルハ無論之ヲ不問ニ措クノ主旨ニ出テタルニアラス全ク此三條ノ盜犯ハ共ニ之ヲ第三百六十六條中ニ包含セシメントスルニアリテ即チ該條ニ於テ二月以上四年以下ノ重禁錮トアリタルヲ今回其刑期ヲ廣クシ其最下限ヲ一月ト改メタルモノハ一ニ之ニ由ルナリ

第三百廿九條

公衆ニ對スル脅迫トハ例ヘハ境界、秣場、水利等ノ争ニ関シ一郡區又ハ一町村ニ對シ之ヲ襲撃シ又ハ之ヲ燒拂ハントスルノ脅迫狀ヲ投シタルノ類ヲ謂フモノニシテ其告訴ヲ待タスシテ之ヲ論スルモノハ此ノ如キ場合ニ於テハ其脅迫タルヤ所謂公ケノ安寧ニ危害ヲ与フルモノニシテ通常脅迫ノ如ク一個人ノ利害ニ係ルモノニ非サルヲ以テナリ

第四百七條追加

本條追加ノ理由ハ放火ニ因テ直接二人ノ住居シタル家屋ヲ燒燬シタル者ノ如キハ第四百二條ニ明文アリテ死刑ニ處セラルヘシト雖モ今廢屋又ハ柴草肥料等ヲ貯フル屋舎ニ放火シ因テ以テ人ノ住居シタル家屋ニ延燒セシメ遂ニ遂ニ間接ニ之ヲ燒燬シタル者ノ如キハ現行刑法ニ於テ其明文ナキカ故ニ均シク之ヲ第四百四條ニ間ハサルヘカラサルノ不都合アルヲ以テナリ

第四百廿五條第九項第十項

第九項ヲ削除シタルモノハ第三百一條ノ末項ニ其創傷ヲ成サ、ル者ハ一等ヲ減スル旨ヲ追加シタルカ為メナリ

第十項ヲ削除シタルモノハ密売淫ニ関スル取締懲罰ハ悉皆之ヲ警察ノ處分ニ付スルニ由ルナリ
第四百廿九条第五項第六項

此二項削除ノ理由ハ都会繁華ノ地ニ於テハ本項ノ如キ大ニ其必要アリト雖モ地方村落ニ至テハ往々其必要ナキカ故
ニ刑法ニ掲ケテ全国画一ニ必行スルノ法章ト為サスシテ寧ロ第四百卅条ニ因テ之ヲ地方官ノ適宜制定ニ任スルヲ可
トスルヲ以テナリ